

1941 年全米日本語教科書の編纂に関する資料分析

Analysis of the Document on the Compilation of the U. S. Japanese Language Textbook in 1941

竹 本 英 代

Hideyo TAKEMOTO

学校教育講座

(平成27年9月30日受理)

1. 研究の目的

本稿は、「新教科書編纂趣意書抄 附首巻解説草案」(以下、「趣意書抄」と略記する)を分析し、1941 年にカリフォルニア州で編纂されようとしていた新しい日本語教科書の内容について明らかにすることを目的にする。従来、この日本語教科書については、編纂過程はもちろんのこと、内容についても明らかにされてこなかった。その理由は、この日本語教科書が太平洋戦争の勃発にともない、編纂事業が中止され発行に至らなかったことや、編纂を担当した南加日本語学園協会の資料などが発見されていないことがあげられる。また、この教科書の編纂に直接携わった杉町八重充は、自分の所有していた資料をもとに『アメリカに於ける日本語教育』のなかで、編纂事業について記述している⁽¹⁾。しかし、この記述には年月などに誤りがみられること、また個人の回想録であるため資料として不十分であることは否めない。

「趣意書抄」は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館の JARP (Japanese American Research Project: 日系アメリカ人研究プロジェクト) コレクションの Box329 に収められている。「趣意書抄」は、「新読本機構一覧」「全米日本語学園教科書『日本語読本』編纂に就て」「首巻解説草案」から構成されている。「趣意書抄」はいつ作成されたもののなか。

「全米日本語学園教科書『日本語読本』編纂に就て」の巻頭には、次のように説明されている。

爰に「日本語読本」巻一の草案を御覧に入れるに当り、編纂委員の考を記して共に御目に掛けますが、それは事業の進行につれ幾分変はつて参ることもありませうから、正式編纂趣意書追て発表いたす筈であります。

この資料は、全米日本語学園教科書という題目からすれば、全米日本語学園が発足していること、また『日本語読本』巻一の草案が完成している時期に発表されたものと考えられる。

『羅府新報』によれば、南加日本語学園が編纂事務所を開設し、具体的には 1941 年 7 月 1 日から教科書の編纂作業が開始されたと伝えられている⁽²⁾。主任編纂者は、島野好平、杉町八重充、吉住保政、井上通政、青木得聞、松澤敦の 6 名⁽³⁾。巻一の編纂は、8 月中旬に完了した⁽⁴⁾。

8 月 28, 29 日の両日、全米日本語学園代表者会議が開催された。この会議の内容についても『羅府新報』で報道されている。会議では、吉住保政から巻一の内容の説明がなされ⁽⁵⁾、二日目には杉町八重充が日本語学園の目的と新読本の編纂趣意の草案について説明したという⁽⁶⁾。またこの会議では、南加日本語学園協会、中加日本語学園協会、北加日本語学園協会、西北部、山間部の教育団体からなる全米日本語教育会が発足し、この時から同会が教科書と参考書の編纂事業を進めていくことになった。

以上のことから、「趣意書抄」は1941年7月から8月にかけて、編纂委員会が作成したもので、おそらくこの全米日本語学園代表者会議で発表された資料であると考えられる。

『羅府新報』の報道では、日本語教科書の巻一の稿本が完成したのは、10月の初旬であった⁽⁷⁾。編集委員の杉町の回顧では、編纂委員会は10月15日付で「日本語学園アメリカ連盟の教科書編纂趣意書」をカリフォルニア州教育局宛に送付したという⁽⁸⁾。杉町は自著『アメリカに於ける日本語教育』のなかで、自分がこの送付文書の原稿を執筆したこと、そして文書の原稿が手元に残っていると述べ、「教科書編纂委員会方針メモランダム」について記述している。杉町の記述と「趣意書抄」と比較すると、杉町の記述は「趣意書抄」の概略が述べられている。したがって「趣意書抄」は、編纂委員会の教科書編纂の意図をより具体的に知ることができる好個の資料だといえる。

以上のことから、本研究では「趣意書抄」の内容を分析し、1941年にカリフォルニア州で編纂されようとしていた日本語教科書の内容を明らかにしていく。以下、引用はすべて「趣意書抄」からとする。

2. 日本語教科書の編纂内容

(1) 編纂の理由

なぜ新しい教科書が1941年に編纂されることになったのか。「趣意書抄」には次のように記されている。

一、アメリカ本土にては（布哇諸島及びその他の属領を除き）従来日本語の教科書として、加州学園協会連合発行のものと、西北部連絡日本人会教育部出版のものと二者があるが、何れも十余年前のもので、今日それ等到大改定を加ふるの必要を認める。

一、然らば改定の要点如何といふに、前記教科書の出たのは、在留同胞間に帰朝者、永住者相半し、従つて児童の教育に関し「日主米従」「米主日従」と意見が分れて居つた当時のことであつたが、爾来時代の推移により同胞の大多数は米国定住者児童は殆ど全部が日本系市民といふことになり、更に最近の時局は一層それを強化して居る時運の変遷に対応するにありと思ふ。

アメリカで編纂された日本語教科書には、米国加州教育局検定のものと米国西北部連絡日本人会教育調査会編纂のものがあつた。前書は1924年から、後書は1921年から出版されていた。これに対して編纂委員会は内容がすでに古いこと、そして時局の変化に対応した「日本系市民」のための新しい教科書が必要とだと指摘している。そして日本語教育の現状について、以下のように述べている。

言語教育の主眼は、本来活動的なべき音声言語の修練と把握にある。しかるに、その国語的環境を背景とし「よみ」「かき」を重視して編纂されたる日本文部省読本の意図、或はその指導方針の踏習を余義なくせしめられたる日本語学園教育は当事者多年の努力と熱誠とに関らず音声言語修練陶冶の実績の見るべきものなかりし憾がある。これは勿論、その言語的環境に恵まれざるに起因するのであるが同時に日本語を習得するといふことが具象的に将来彼等の生活に如何なる福祉をもたらすものであるか、明確にされてゐなかつたこと、及び民族的自覚の欠如を物語るものといつてよからう。即ち指導原理の不確立と、方策当を得ざりしを思ふ。

新教科書の意図するところは、それゆゑに、過去に省み、現代に処し、将来に希望する前述の諸点をその教材に、その一貫する精神の流れに具現するに在る。

日本語学園の教育では言語教育の実績があがっていないと述べている。その理由として、日本語学園が読み書きを重視した日本の『国語読本』を使って日本語教育を行っている点と、日本語教育の指導原理と方法が確立していない点をあげている。したがって、編纂委員会は新しく日本語教科書を編纂することで、新しい言語教育の指導原理と方策を提示し、現状の言語教育の実績をあげていく意図があつたとみられる。

(2) 編纂の方針

それでは、どのような教科書を編纂しようとしていたのであろうか。まず対象については、以下のように説明されている。

一、アメリカに生まれた日系児童に日本語を学ばせる教科書である。

一、それで主として日本語学園で使用するものであるから、学園教育の本旨である「米国教育の精神に準拠し、善良有為なる市民教育の補助機関である」といふことを念頭に置き、日系児童の現在並に将来の生活に必要な日本の言語を学び、文化に通ぜしむることを主眼とする。

一、されば由来優秀を以て知らるゝ米国教育の補助となるには、日本の最も善い所を択取し、米国人にても推奨して居り、真に米国の文化に貢献し得べきもの（例へば尊長敬老、勤労耐久といふが如き）を採用することゝする。

一、今や第二世は追々学業を卒て、第三世が続々学齢に達して居るし、第四世、第五世の将来を思へば、今日の言語と共に明日の言語といふことを考へ、日本語が外国語として学ばるゝことを予期して居らねばならぬ。

新読本編纂の趣旨は米国建国の精神に則り日系市民をしてその母国語たる日本語の習得により文化的寄与を此の国になさしむるを主眼とするのであるが、同時にそれは彼ら自身の将来に福祉を**寛**さしめんがためでもある。

しかるに彼らにとつて日本語はまさに外国語である。一世諸氏追々その数を減じ、二世平均年齢はすでに日本語学園在学年齢を突破して二十歳を超ゆるに至らんとし、日本語環境の減少は日本語教育四十年の歴史あるにかゝらず甚だしい。

日本語教育の高遠なる理想は一先づ之を措くことゝしてかゝる現状に対処して、日本語教育の性格は如何にあるべきか、之が今次新教科書編纂の第一に検討し意図すべき段階である。

この教科書は、アメリカで生まれた日系児童を対象としており、二世だけでなく三世以降の日系児童を想定した外国語教育としての日本語教科書であった。またこの教科書は、主として日本語学園で使用することを目的とした。日本語学園の教育方針については、米国市民教育の補助機関として捉え、日本の善いところを取捨選択しながら、米国文化に貢献する内容が採用された。

次に、新しい指導方針について、以下のように述べている。

一、次に従来とても同様であつたが、学園の生徒は一方にこの国の学校に通つて居るので、両教育の協調、両教科書の連撃といふことを考へ、新教科書は特に児童の生活に即し、興味を重んじ、知情両方面の涵養に力むる方針にて、それ等の点に就て委員は加州々庁教育局、中央政府学務局当事者の援助を求めて居る。

一、尚ほ最新の語学教育説に鑑み、書き言葉より話し言葉に重きを置き、文字を教ふるに先ち、絵画を用ひて聴き方話し方から始め、発音を練習させ、語彙を増殖させ、次第に読み方に進ませやうとする点に於て、新教科書は従来のもものと全くその趣を異にする。

新教科書は、特に児童の生活に即して、興味を重んじ、知情の両方面の涵養を求める方針を採った。そして指導原理については、聴方と話方から始めて読方へと進む、従来の言語教育法とは異なる方法が採用された。

(3) 教材の内容

それでは、どのような教材の内容が考えられていたのか。まず、教科書の体裁は、以下のようなものである。

一、「日本語読本」は普通日本語学園の修業年限を八ヶ年とし、一ヶ年二巻づつ使用、全部十六巻となつてゐる。そして一ヶ年の授業を約四十週、二百時とし、初学年読本は二十課内外、高学読本は二十五課内外とする。

一、仮名遣ひは国語調査会の所定に依り（御承知とは存じますが、御参考に供せんと別項掲載）巻一、二或は三の半までは片仮名使用、それ以上は平仮名、或は片仮名平仮名を併用する。

一、漢字は日本系市民の立場より見て必要なる一千字を、新聞用字、タイプライター文字等を参考として選択し、巻一より出し始め、第二、三期時代に殆ど全部を出し、児童の最も記憶力旺盛の時期にしっかりと覚えこましめる。尚ほ文字は正しきを選ぶが広く使用されるものは成るべく簡単なるものを選ぶ。これを補ふに初学年用の色彩画、高学年用の写真等を以てし、児童教科書の体裁を整ふべく、切に各方面のご高評を乞ふ。

日本語学園を8年制とし各学年に2巻ずつ作成することから日本語教科書は全16巻とした。仮名遣いは国語調査会に準拠し、使用漢字は千字とされた。次頁の【表1】の新読本機構一覧をみてみよう。理論、意図、形態にわけて8年間の日本語教科書の教材が提示されている。この一覧にしたがって全16巻が編纂されることになっていた。

それでは、具体的にどのような教材が選択されていたのか。次のように説明されている。

一、そこで教材として読み方、話し方、書き方、綴り方等に互る語学の教授は固より、歴史、地理、理科、産業等各科の総合に心がけ、特に同胞渡米以来奮闘の事蹟と現在生活の実際に重きを置きて取材するやうに力めてそれを大体別表の如く毎巻に盛りこむことにする。

一、由て委員は先づ日米新古の教科書始め参考書類を獵り、更に日本の教科書は台湾、朝鮮等外地用、満州支那等国外用のものより、布哇ブラジル等のものまで目を通すことゝし、若し参考となる書物を御持ちの方あらばと御尋ねして贈つて戴いたものもあるが、尚ほこの際この点に関し大方の御援助を願つて置く。

教材は、文学、市民、歴史、民族、理科、実業、地理を「総合」した内容が考えられていた。【表2】各教材毎巻排列予定表をみると、文学の材料が35%と多く、市民、歴史、民族の教材は全体の42%である。あらゆる内容を総合した教材排列が考えられていたことがわかる。教材の参考書としては、日米の教科書や参考書、さらに日本で作成された植民地・外地用の日本語教科書なども収集されようとしていた。

そして教材は、以下のように四期に排列された。

一、かくて蒐集せる教材は児童心身の発達に即せしめ、その生活の実際と生活環境と照応せしめ、段階を追うて進むやう、下記四期に排列する。

第一期	第一、二学年（六、七才）	巻一一四
第二期	第三学（八才）	巻五一六
第三期	第四、五、六学年（九、十、十一才）	巻七一二
第四期	第七、八学年（十二、十三才）	巻十三一十六

一、第一期に於ては、特に児童生活に於ける躰と日本語の初歩的練習とを主とし、日常行為にあらはれて来る事象に就て、見方、考へ方並に実践を指導し、且想像力を豊ならしめるやうに力める。第二期に於ては、生活体験に対する正しい理解力と発表力とを伸張せしめ、次第に道徳的理想構成の方向に向かはしめようとする。第三期に於ては、児童を自覚的ならしめることに重点を置いてゐる。第四期に於ては、第三期に至るまでの基礎的な錬成の上に、日本系市民の立場を知らしめ、その重要な使命を全うせしむる資質に培ふものである。

児童の発達段階に合わせて四期に分けられている。日本の国民学校教育のスローガンである「錬成」というキーワードも使われている。この四期の排列を国民学校教科書の排列と比較してみよう。国民学校の教科書には全ての教科書に通じる編纂一般方針があり、教材の体系については、「教材ハ児童心身ノ発達ニ鑑ミ、發生的体系ヲ取りテ組織化スルモノトス」とし、初等科と高等科の8学年を第1期初等科第1、2学年、第2期初等科第3学年、第3期初等科第4、5、6学年、第4期高等科第1、2学年の4期に分けられている⁽⁹⁾。つまり国民学校の教科書は、児童の心身発達の段階に即応して、生活的教材を採用して四期で排列されていることから、編集委員会の四期の排列は、日本の国民学校の教科書を参考にして考案されたと考えられる。

編纂委員の一人であり南加日本語学園協会の会長でもあった島野好平は、1941年の2月の『羅府新報』に「新体制の二世教育」と題する論文を寄稿した。島野は、日本の国民学校の教育を「二世教育の資とする

【表1】新読本機構一覽

[illegible]

△本一覽ハ實際編纂完了ノアカツキ数字ソノ他ニ幾分ノ変改アルヲマヌカレズ。(出典)「趣意書抄」

【表 2】各教材毎巻排列予定表

巻	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	計	割合
教材																	
文学	9	9	8	8	8	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	120	35
市民	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	65	19
歴史	1	1	2	2	2	2	2	3	4	4	4	4	4	4	4	45	13
民族	1	1	2	2	2	2	2	3	3	3	3	4	4	4	4	40	10
理科	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	30	9
実業	1	1	1	1	1	1	1	3	2	2	2	3	3	3	3	28	8
地理	0	0	0	0	0	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	20	6
計	20	20	20	20	20	20	20	25	25	25	25	27	27	27	27	348	100

(出典)「趣意書抄」より、筆者作成。

に足るものも多々あるを以て、私は茲にそれ等を拾ひあげると共に、二世教育の新体制に就て記したいと思ふ」と述べている⁽¹⁰⁾。その内容は、まず「一体的錬成教育」であり、「只知識となるばかりでなく、情操を養ふ為にもなり、身体を太らす為にもなり、否彼等の生活の為にもならねばならぬ、そしてそれが常に身に着いてみてすぐ役に立つやうに錬成（錬磨育成）しようといふ教育法」である⁽¹¹⁾。次に「即生活行事教育」であり、「今一度児童を遊びにひきもどして、教師も生徒も一しょになつて遊びつゝ、その間に追ひへ――嬉をして進んで児童をしていつか遊びより様々の行事に、又行事と共に労作を試ましめ、身心一如の活教育」である⁽¹²⁾。最後に「新体制日本語教育」として、国民科国語の「読み方」「綴り方」「話し方」「書き方」の四要素を取り上げ、二世教育については「音声言語を第一義諦に置くべきで、我等の今後大いに力むべきは当にこの『話し方』『聴き方』であらう」と論じている⁽¹³⁾。島野の論と「趣意書抄」を比較すると、新しい言語指導の方針や教材内容に、日本で1941年4月から実施された国民学校の教育原理や国民科国語が参照されていたことがわかる。

3. 稿本『日本語読本』巻一の分析

次に「趣意書抄」の「首巻解説草案」の部分から、稿本『日本語読本』巻一の内容について分析していこう。まず、全体の構成について、以下のように説明されている。

新読本巻一は機構上之を二つの部分に分けることが出来る。即ち、巻頭二頁より十七頁に至る絵の部分と、十八頁より巻末七十二頁に至る文字の部分とである。文字の部分はさらに之を十八頁より二十九頁に至る部分、三十四頁より六十三頁に至る部分、六十四頁より六十九頁に至る部分、に大別することが出来る。かりにこの各部分に名称を附するならば

入門の入門部（プレプリマー） 二頁―二十九頁

入門部（プリマー） 三十頁以下

の二大部門に分くることもできるしさらに形態上の考慮を加へて之を分くれば

韻文教材の部（主として十八頁―二十九頁）

生活文教材の部（主として三十四頁―六十三頁）

説話文材の部（六十四頁―六十九頁）

となすことも出来る。

今右の機構の言語学的な又言語社会学的な解説は之をなす余裕を有しないが之が教科書編纂の定法であることにあやまりはないのであつて各部門教材の表現面が醇正なる童話を以つてなされ、素材たる表現対象が児童環境に即しつゝ、その心身発達の過程に応じつゝ、取捨排列せられたる点も、また定法であることを相異なるのである。定法とは、しかしながら一面特殊なる事象への考慮の拂はれてをらざることを意味することになるが、新読本首巻の直面すべき特殊事象に如何なる考慮が拂はれたかが次に示されなければならない。

上述の記述を分析すると、巻一の前半のプレプリマー 28 頁のうち、57%は絵画部分である。文字の部分の 55 頁は、韻文 22%、生活文 55%、説話文 11%であり、生活文が半分を占めていることがわかる。「新教科書編纂の定法」として、「醇正なる童話」による表現、児童の環境・生活文を心身の発達に応じて配列したと説明されている。それでは、次に巻一の目次の内容を分析していこう。「首巻解説草案」には「早急に書下したもので不充分なる点は後日の推敲にゆづるべきを思ふものである」と但書が付されているが、目次と訂正箇所と頁が記されている。【表 3】は、筆者が巻一の目次内容を国民科国語の教科書である文部省編刊『ヨミカタ』一、二と比較したものである。

巻一の「校庭遊戯の図」「ヘイタイ」「お正月」「アカイ」「アオイ」「ハヤクオイデ」「ススめススめ」「ヒコウキ」「ヒガクレル」「オトウサンオハヨウゴザイマス」「イタダキマス」「イツテマイリマス」「アツマレキヲツケ」「スズキツネオサン、ハイ」「センセイサヨウナラ」「シリトリ」「カクレンボ」「ゴメンクダサイ」「ハイ、アリガトウ」「オニワハサムイカゼガフク」「ウサギトカメ」「シタキリスズメ」は『ヨミカタ』一、二にもみられる。巻一は『ヨミカタ』一、二を参考にして編纂されたことがわかる。

巻一の内容については、次のように説明されている。

音声言語指導のための部門、これは二頁より十七頁にわたる絵の部分であるが、この地に於ける日本語教授の性格が外国語的であるための特殊なる考慮のあらはれである。その意図するところは絵による直観教材を通し、まづ教師の「話し言葉」を聞かしめ、話中自ら耳による五十音の把握をなさしめ、教師児童の話し合ひを通して語彙、すなはち「ことば」の獲得に導き、学校家庭に於ける日本語的環境の創造、増成を志すのである。しかも素材たる画面はいづれも児童に親しみ深いものであり、児童の生活暦が絵による言語を以つて語り出でられてをるのである。大小の画面の醸出す雰囲気を経験的に一貫するものは、日本語学園の生徒となれる、「たのしさ」と「うれしさ」、その躍動する喜びに内容を与ふべき、生活指導の「しつけ」である。

民族的自覚に培ふべき「お正月」の画面、善良なる市民の自覚に培ふべき「学園に翻る米国旗」又は「国旗掲揚式」の画面、それへに日本語による市民補助教育の実践と見るべきである。

プレプリマーでは、音声言語指導は絵による直観教材を採用し聴方から入ると説明がなされている。【表 3】から、目次の内容を分析してみよう。

「登校図」「校庭遊戯の図」「児童の朝の図」「センセイコンニチハ」「ガクエンノハタガミエマス」「ミナサンホンヲオアケナサイ」「コンドハエヲオカキナサイ」「センセイサヨウナラ」「ガクエンノマエニジドウシャガ」等は、日本語学園の様子である。これは、上述の「日本語学園の生徒となれる、『たのしさ』と『うれしさ』、その躍動する喜びに内容を与ふべき、生活指導の『しつけ』を描いた部分である。

次に「シリトリ」「カクレンボ」「マリナゲ」「オハジキアソビ」などの日本の遊びや、「ウサギトカメ」「シタキリスズメ」などの日本の昔話、日本の文化としての「お正月」が取り上げられている。これは「民族的自覚に培ふ」日本関係の内容であり、教材としては「民族」の内容にあたる。「民族」の分量については、前掲【表 2】に巻二以降の予定が示されており、【表 2】によれば「民族」の部分は全体の 10%と量的には少ないことがわかる。

また、「善良なる市民の自覚に培ふ」「市民補助教育の実践」として「国旗掲揚式図」や、「ハロイーン図」「感謝祭」「クリスマス図」「クリスマスツリー」の項目がみられる。これはアメリカの生活暦や行事の部分である。

【表 4】は、各課の訂正箇所を表にしたものである。

「動物図」では「下段ボニーライドの図とする」、「オウマガハシル」では「ホースバックライディングの場面とする」、「オルスバン」では「キューピーと新出させる」など、挿絵によってアメリカの内容に修正、訂正されたことがわかる。

そのほか、「首巻解説草案」には、目次の内容について以下のような説明がなされている。

【表3】 卷一と『ヨミカタ』一、二の対照表

課	ヨミカタ①②
登校図	
校庭遊戯の図 -----	体操の図①
児童の朝の図	
同上	
ハロイーン図	
カニ・フネ・ワシ・ヘイタイ -----	ヘイタイサン①
動物図	
感謝祭	
ダイコン・ネズミ・ゾウ・デンデンムシ	
クリスマス図	
お正月 -----	お正月②
母音図	
国旗掲揚式図	
アカイ -----	アカイアカイ①
アオイ -----	青イ, 青イ②
タノシイオケイコ	
ハヤクオイデ -----	コマデオイデ①
センセイコンニチハ	
イチニサンハシレ	
ススメスス -----	ヘイタイサンスススス①
トマレトマレ	
オウマガハシル	
ヒコウキ -----	ヒカウキ①
ヒガクレル -----	日ガクレマシタ①
デタデタツキガ	
復習	
オトウサンオハヨウゴザイマス -----	オハヤウゴザイマス①
イタダキマス -----	イタダキマス①
イッテマイリマス -----	イッテマキリマス①
ガクエンノハタガミエマス	
アツマレキヲツケ -----	キヲツケ①
スズキツネオサン, ハイ -----	ホンダイサムサン, ハイ①
ミナサンホンヲオアケナサイ	
コンドハエヲオカキナサイ	
センセイサヨウナラ -----	センセイ, サヤウナラ①
ホシガワタシヲミテイマス	
シリトリ -----	ベンキキツネネココブタ・・・①
カクレンボ -----	カクレンボ①
ゴメンクダサイ -----	ゴメンクダサイ①
ハイ, アリガトウ -----	ハイ, アリガトウ①
マリナゲ	
シリトリトマヨイミチ	
オルスバン	
ガクエンノマエニジドウシャガ	
クリスマスツリー	
オニワハサムイカゼガフク -----	スズシイカゼガフイテキマス①
オハジキアソビ	
ウサギトカメ -----	ウサギトカメ②
シタキリスズメ -----	シタキリスズメ①
五十音 長拗音 濁音 半濁音表	
漢字 (筆順表)	

(出典)「趣意書抄」と文部省編刊『ヨミカタ』一、二, 1941 年より, 筆者作成。

【表4】各課の訂正箇所

課	訂正箇所	頁
登校図	校舎屋上の鐘楼はのぞく	2
校庭遊戯の図	同上、及びマーブルあそびの児童は遊戯参加を志す児童図にかへる	4
児童の朝の図	下段学校道具は整頓したるものにかへる	6
同上	下段教室の図・先生を立たしめ生徒は姿勢正しく先生の話をかかしめる	7
ハロイーン図		8, 9
カニ・フネ・ワシ・ヘイタイ	ノコギリ・ゲンカン・ゲタ・ベントウバコ	10
動物図	下段ポニーライドの図とする	11
感謝祭		12
ダイコン・ネズミ・ゾウ・デンデンムシ	ラッパ・ピンポン・コップ・ペン	13
クリスマス図		14
お正月	女兒をも一人ふやす出来得れば感謝祭図と同家庭とする	15
母音図	欄外にア・イ・ウ・エ・オの口形図を添ふ	16
国旗掲揚式図	手の位置をかへる	17
アカイ		18
アオイ		19
タノシイオケイコ		20
ハヤクオイデ		21
センセイコンニチハ		22
イチニサンハシレ	スタートした瞬間の絵とする。小さな子供にする。	23
ススメススめ	シグナルに対する歩行方向の訂正	24
トマレトマレ	手をひかれた子供は新入生らしくシャンとさせる	25
オウマガハシル	ホースバツクライディングの場面とする	26
ヒコウキ	ヒコウキの絵の訂正	27
ヒガクレル		28
デタデタツキガ		29
復習	ヒガサをヒガサらしくする。モチを三宝にのせる。 キレをネクタイとまちがはれぬやうにする。	30 33
オトウサンオハヨウゴザイマス		34
イタダキマス	絵を中にし右上にイタダキマス左下にゴチソウサマを入れる。	35
イツテマイリマス	新入生らしくする	36
ガクエンノハタガミエマス	ゲンキヨクをつづけて、ミンナガと別行にする。鐘楼をとる。	37
アツマレキヲツケ	レイを別行とする。	38
スズキツネオサン、ハイ	背景をつけ一人一机とする	39
ミナサンホンヲオアケナサイ		40
コンドハエヲオカキナサイ	全般的に新入生らしく、幼く	42
センセイサヨウナラ		44
ホシガワタシヲミテイマス	女の子とする。ネムソウのウはとる。	45
シリトリ	文字の中に字の上下に絵を交互に書く。	46
カクレンボ	ヨツトイデである。	47
ゴメンクダサイ	戸口の背景、一人一人の立礼とする。	49
ハイ、アリガトウ	二行を前頁に入れ、この頁末にオトウトモイッショニイタダキマシタを入れる。絵も同然。	
マリナゲ	トウリをミチと直す。	52
シリトリトマヨイミチ	指導がきを欄外に入れる。	54
オルスパン	イモウトトフタリデとする。キューピーと新出させる。	56
ガクエンノマエニジドウシャガ		58
クリスマスツリー	原語を上掲する。トイッテ・オクリモノヲキレイニとする。	60
オニワハサムイカゼガフク		62
オハジキアソビ		63
ウサギトカメ		64
シタキリスズメ	六十七、六十八頁の絵は六十八、六十九頁に入れる。六十九頁の絵が六十七頁に来る。	66
五十音 長拗音 濁音 半濁音表		70
漢字（筆順表）		72

(出典)「趣意書抄」より、筆者作成。

①反復練習の採用

目次で採用されている「迷路」「しりとり」について、以下のように記されている。

三十頁より三十三頁にわたるものと五十四頁―五十五頁のもの、二つであるが、この考慮は教育実践の賜である。心ある實際家が已に多年いろ／＼と考案して復習、即ち反復演練に用ゐたものはかうしたものであつたであらう、自ら支度して与ふるであらう復習の教材をこゝに見出たる感ある實際家の多きを思ふのである。第一の教材は既習文字を欄外にかかげて、絵を示してその事物名を呼称、書写せしめつゝ、その文字に習熟せしむる意図を有し、第二の教材は、「迷路遊戲」と「しりとり」を併用し興味ぶかく既習文字を反復練習せしめ、一方語彙の増加を企るものである。

「迷路」や「しりとり」は、反復練習と復習のために取り入れられたと述べている。復習と反復練習については、実践家によって行われた「教育実践」から考慮されて採用されたようである。しかし、『ヨミカタ』一にも出てくる内容でもある。

②童話法の採用

次に「アカイ、アオイ」について以下のように説明されている。

文字指導の入り方には相当の苦心と考慮が拂はれたのである。十九世紀初頭頃まで用ゐられた字母法がジャ・コトー（一八二〇）の文章法におきかへられ、さらにライプチヒ市民学校長フォーゲルによる範語法が、直観教材を通して言語、文字を指導することのすぐれたるを唱導さるゝに至り（一八四二）言語指導教科書は爾来フォーゲルの範語法を採用するを常識とした。しかるに廿世紀に入つて、ジャ・コトーの文章法とフォーゲルの範語法の各長所を併せたるが如き童話法が生るゝに及んで童話法は範語法に代るに至つた。新読本、また、童話法の採用に腐心した。しかしながら、まづ五字の母音より提出して、たゞ一の童話文を得んとするのこゝろみが、その素材において、表現に於いて、如何に制限されたる困難事であるかよくわかつたのである。新読本巻一の文字言語指導の入り方は、かくして特殊なる入り方をするることにより、この困難を処理することに成功した。アカイ、アオイは最も児童に印象的な色感を表す。その属性はまたよく児童に親しまるゝ。しかも日本文の特徴たる、主語をとることのみによつて、文章を成し得る形容詞である。前十六頁にわたる絵画教材により一通り音声言語に慣らされたる児童はさらに絵の最終頁に於いて母音発音上の訓練を経てゐる。児童は殆ど労することなく「アカイアサヒ」「アサヒガアカイ」を叫び「ハナ、アカイハナ」を指示し、「アオイソラ、ウミ」に心を走らせる。アカイ、アオイの属性を唱呼する児童に、豊富なる会話の進展のうちに、ア、カ、イ、オのみの文字が与へられて、今まで活動し来つた動的なる会話態度を、徐に、静的なる書字書写の態度に導かんとする。急遽なる移行をさけ、依然として活動的な会話の態度は益々之を伸し育て、行く意図の下に。

新しい教科書では「醇生なる童話」を使う童話法が採用された。しかし「アカイ、アオイ」も教材としては『ヨミカタ』一に登場している。

③未分化の教材

低学年が未分化の時期にあることについて、以下のように説明がなされている。

教材の分野が市民、民族、歴史、地理、理科、実業、文学の各方面を網羅すべきことは、すでに編纂趣意書中にのべられたところである。低学年に於いては、さりながら、それらが未分化の時機にあり、韻文、生活文、説話の形態中に、あからさまならぬ意図が藏されてゐる程度で満足されねばならぬ。とはいへ、そがたゞ読みすてられ、書きすぐさるゝまゝで放任さるべきでなく、タノシイオケイコに於いて学習を楽しむとする躰なり習慣に培ひ、ハヤクオイデに兄弟愛を印象づけ、センセイコンニチハに長上への礼儀を示し、イチニサンハシレに正しいスポーツの精神と健康の明朗性へあこがれしめ、ススメススミンナススめ及びトマレトマレを通して市民教育への発足をなさしむる等、各課それ／＼に心懸け

て文字背後の意図画面のゑがく見えざる物語を感得せしむる必要があるであらう。そこに未分化ながらそれへに教材分野が表現対象を通してあらはれ来るのである。その未分化なる状態はやがて高学年に進むにつれて分化の相を明確にするであらうし首巻教材を温床として、いろとりへこの花の咲き出づるべき連関が、全十六巻に網の目の如く張られてゐることを知るべきである。

新しい教科書では、目次の項目には本来の意図が見えないように工夫がなされていた。躰、習慣、兄弟愛、礼儀、スポーツ精神、市民教育など、高学年に進むにつれて分化するよう、低学年では総合的な「温床」として目次が編纂された。

④敬語表現の採用

そのほか、「首巻解説草案」には、低学年の敬語表現について説明がなされている。

表現は、低学年に於いては常に児童の主体的態度に即して、あるがまゝの客観的には叙述されてゐない。動物はもとより心なき自然物が、多かれ少かれ擬人化され童話化されてゐる。更にこれと同じ立場から、敬語の使ひ方にも略一貫してゐるものがある。即ちおとうさん、おかあさん、おちいさん、おばあさんの言動を叙述する場合、常に敬語的に表現されてゐる。即ち「オトウサンガオトメニナリマシタ」「オッシャイマシタ」であつて「トメタ」「イツタ」等の如き叙述の客観性は未だこゝには現れないのである。勿論説話的叙述は別である。主観的叙述又は表現が首巻を特徴づけてゐるのである。

年長者に対しては一貫して敬語を用い、尊敬語を取り入れている。

⑤関連人物による構成

最後に、全体を関連づけるための工夫がなされていた。

各課の人物はそれへに相連繫してゐる。ユリコ、タロウ、ツネオ、フミコ、ジロウ、キヌコがその主要人物であるが、かれらは兄弟であり、友達であり、それらがそれへの生活記録を持寄つて、それが首巻の生活文の主体をなしてゐると考へてよいのである。絵によつて、それが誰であるかを知らしめ得る程度に挿絵に於ても考慮が拂はるゝ筈である。

内容が連鎖するように、登場人物は関連人物で構成された。生活文を主体とし、子どもが自分の生活とも関連づけながら日本語が学べるように工夫がなされた。

4. おわりに

「趣意書抄」の分析を通して、編纂委員会が作成しようとしていた新しい日本語教科書の内容について、5点にまとめた。

まず編纂委員会は、時局の変化に対応した新しい日本語教科書を編纂し、新しい言語方針を提示しようとした。編集委員会は二世だけでなく三世以降の日系人児童を対象とした外国語としての日本語教科書を作成した。

次に、この教科書は日本語学園で使用されることを意図していた。日本語学園の目的は米国市民教育の補助機関であることが明確にされた。児童の現在と将来の生活に必要な日本語の言語と文化に通じていくことを目的とした。

第3に、内容には日本の内容とアメリカの内容の両方が採用された。日本については、米国人に推奨できる日本の最も善い所を選択し、アメリカの文化に貢献できる内容。アメリカについては、生活、生活暦、行事、日本語学園の生活が描かれ、アメリカ人としての徳育の内容が盛り込まれた。

第4に、直観教授、聴方から入る教授法に基づく教材配列が採用された。

第5に、教材配列、総合カリキュラム、聴方教授、生活語中心の内容など、日本の国民学校の教育理論や国民科国語が参考にされた。

今後は、なぜこのような教科書が編纂されるに至ったのか、南加日本語学園協会による日本語教科書の編纂の過程をみていくことで、明らかにしていきたい。

注

- (1) 杉町八重充『アメリカに於ける日本語教育』大島一郎, 1968年, 113-120頁。
- (2) 「重責を担つて新教科書編纂 富尾ビルに編纂事務所を開設」『羅府新報』第12399号, 1941年7月9日, 5頁。
- (3) 「二世教育に即した新教科書の編纂 大任を負はされた委員の努力 研究者の提案を歓迎」『羅府新報』第12409号, 1941年7月19日, 3頁。「教科書編纂苦心 編纂委員会だより」『羅府新報』第12414号, 1941年7月24日, 3頁。
- (4) 「新教科書の挿絵は杉本画伯揮毫 稿本は近く完成の運び」『羅府新報』第12441号, 1941年8月20日, 3頁。
- (5) 「全米学園代表者会 教科書編纂討議 北, 中加は全部学協に連絡」『羅府新報』第12450号, 1941年8月29日, 3頁。
- (6) 「各地教育団体を以て全米日本語教育会 教科書編纂や当局との連絡を学園代表会議決議」『羅府新報』第12451号, 1941年8月30日, 3頁。
- (7) 「日本語読本巻一稿本 各地学園へ送附 廿五日迄に意見や批評を求む」『羅府新報』第12490号, 1941年10月9日, 3頁。
- (8) 前掲 (1), 杉町, 116頁。
- (9) 日本放送協会編『文部省国民学校教科書編纂趣旨解説』日本放送出版協会, 1941年, 5-6頁。
- (10) 島野好平「新体制の二世教育 (二)」『羅府新報』第12253号, 1941年2月11日, 4頁。
- (11) 島野好平「新体制の二世教育 (三)」『羅府新報』第12254号, 1941年2月12日, 4頁。
- (12) 同上。
- (13) 島野好平「新体制の二世教育 (四)」『羅府新報』第12255号, 1941年2月13日, 4頁。

【付記】

本研究は, JSPS 科研費 15K02641 の助成を受けたものである。